技桑物業集

二十九上

伊地知文庫
文庫20
360
32

文庫20
360
32

扶桑拾葉集巻第二十九上

目録

東山〻家記　豊長勝後
胡ほら家　同
西山〻家記　同
小の衣　同
春の山ゆみ　同
大井川道遥記　同
九州の道の記　同

扶桑拾葉集巻第二十九上

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

東山々家記

伊達和文庫

伊達和文庫

豊臣勝俊

[illegible]

文にくえ云とつ・初かしら倪のさ間も・於(かうに名字
なしも・石の行とは・庵人あらんなる路とおくしく望を
めり・うしれかるに・東央宮東閣の・尾とうやいひ事・上
蔡の覺せし・況も・終よくふし拖しまは紙を(いいて
字をとゞ浮かれと・ちるかよ殘りと浮れる目とも・何れ
れよう浮を也なく・をしれからに何きやうなるを・今
よも・人ハ名かなくに事めし・まりハ花とい志られぬ・山ハ
畑かかる孫也何ともかたに・家とめく字ものてる松・枝迄
かたに之に・木を備しいくも也かを(伴くも(さよも
何ともに・まへ日谷何り・長庸橋を作くる・わたり彩徑・百
をかあまり・とゞとく蘇門の響風と志るこれしも何ても・

愛と迄て竹のもやしよ至る・夏ハすくしに掬しもきさ
め・いく夜紙かをしてもいかに・葉分の風まいふき紙わ
もれ・新樹の枯よ時をと字・初音ハまつわかるあまを
おもいうかかるも・山のかいいかりて覺ま・秋ハあふれ
こしかしよう浮とさを・花と実也二度みもやし・木の
を也よ目と言し・ちかかに目すきいよう浮とい事も・
つれしなしを・ちくこ木枯の身もしむかり吹ある夕
にくこ・書とふ麻の都何ちれよ・山田の記しもとく字
なるかしるへくこし・良暹法師の風也紙立てかか
めきんハ・けれこれもかのとのみこかんとおといめてを
ま・なれらこあしかぬ秋の花かり・こ浮しうつさぬ

常ほとむ所ちりはあつみまやのんしきかいはみ花めるれ
山の志めとさるあるのり・こゝかちふかりけちかくて・
かちりめつりて南よりうとんしその志字へも物はれき
まる・物をかたる岩屋とうきて・あかり記さく津ふる
物のり・そのふちきへいちゝ・いぬれかたは書しあるん
やうにて・ひさしとのくかたちとへし・すこしく津のり
あるを所のるとし・水とあめ池めをるほらう物・こも・かい
つちこ・かかしのと物ほれい記後こうて・水草かち
かるほ・かちつれ三ツ四ツ二ツ三ツ一ツかし・ひるあるし
れよの飛て中ほ・なのめほきるほちうと浮て・
新先生とかるいつ・松洞庵よのわれん・那の長ハ只

一村の嶽よくとりて・大江の正言ゝ長ほちまて詠めるし・
今もかちぬ西新かれし・のちれ弟世のあるこゝかし・
津くり・うけ○あるも○の・数も志れぬ中よすむ
ん人こ死・さ面しのつまりねこめ・山川ののきれ
水ほいこゝかるゝ後くつもかしや・和つるほ石物しもへの・
うけりと今・彼のとうかたほいかしきくしら・や
まこの和後らありとゝ・和を後しく毛もいつあち
ね・色かそるゝ色ハ・牙まかしのりけしまちしハ
のしらのつきて・せれかあつほ・ふまへつくしちのこと
し・車のくほしつゝし・いきうとハ・庵よとれる有
きとし・とのれよかれまもうかゆしし・ときしくしくも荒

志ひかゝる庭の木のまゝ乾荷て
夜ゆゑ花萬ゝ月わるゝ見花
こゝ後ゆゑ身まてなりぬ月と花の
ゆゑれとゝ後ゆゑ夜まれきしゆゑ
思みの世のみしとてゝ月をゝ
ちりてまゝ咲萬ゝ思ふ

これ一ゆゑ、こゝふくいかゝとのかゝれと、わゝ如れゆゑかきを
ともいゝかいのことへく、ゆゑ身もあるもかん、かくいゝ淋く
ゆゑ、そもかうなく月も入かんとすへし、月をゝゆゑ
れかんと、のちも身のもゆゑ、萬ゝ後ゆゑれか
らんと、のちもたのむへしや、人をゝみむと後も枯い

風しや寄しこれあしゆゑ、後ゆゑ物をゝ見

西山々家記

同

小塩山の麓に蘭字ゆゑ勝持寺と書る道風の
額ゆきやゝなり、方丈のまへに西行ゝへゆゑとゝいつゝ
ゆゑ老木れゆゑゆゑ、こゝ後ゆゑ枝のゆゑ身長
とわきれぬこゝ後ゆゑもむかしわかへてかきけ如ゝ
し、ゆゑしの僧忠海やつかれとゝし、老逆院と申
ゆゑ大とこれ寺子かゝし、志りへに勝地とむくふ、しし
こゝあやしに根ゆゑ、根ゆゑまゝにわかれて、かこみ無し
牛もかくしつへし、この社様に似るゝ半ゆゑ、こゝらの

かゝる才の齢におもひいでし。まことに此の世は黄粱の
夢なれど、なかなかにおもしろき事もありけれ
しかれども、さしもの人は東山わたりの山陰に松の扉
をしめ、あるは大宗師の教をまもり田井に椿井をむすび
もろともなる心もや、菱をやうらみ、今やなをむかし
侍る。まことに荘周がいひし胡蝶とやらん、夢のむかしや
ゆりきん

ゆめの衣

同

山も山深きはいかゞ都ちかくてすみかいと思ふ
うしとおもひし花に住しけれ。岩に岩をふみてゆく歩

様ゆかしくて夢にかよひけるに花散りしけれ。ゆめにかし
の奥の方へまかりしに、どことなくやさしくさまよひける事
青根が峯の昔かたりゆかしさのいとなれ。岩根の苔
ことはなかりけん嵐も心よはくなりて、ほそ
しほかの女才の女は、何ともしれぬ夢のみいりて、のこみ
よそめの花ちらしやいかに春秋をむかへて、かゝる
谷の戸あけゆく春をとめけん。門にさし入る道に
かさなりて、老まよふ道の松の古き人にけり
秋としみ、池の水草も殊に生ひしげりの、ことにかれ
あり。さればなすつる松むしの音すみて、蛙の声そ
なくかすかしの秋は、いとゞなつかしげの音をそなへんかし。

同

祝と親をとるなれば・松の根岩のくらゐ海よりなりて・渕
とのをく・水の色藍なりしこくかりて・獨りに底しけり
ゐる・魚ともれけりつまりあしむしに・おのしと見ゆるなく・
若狭うちは馬ひかせ海よのきれば・采の潘圓ゆ
三峯と覺するなら也・こゝ寛永九人りの紫狀
の長月の末の日・大井河より田かりてせう田うに・若毎
きる天龍寺乃便房・三秀院とう云かる所よ出とりぬ・
何ましの事ハ大醫玄治法京法法きゝ毎・何のこえ
ゐるとのゐこれ・さらゐる志とも・獨りけりかりなきと
なりぬ自い志めやうは云かりし・作ゆる奴雇も飽
まて飲食醉志れ毎也・何ゐれば若ほかりれる大井

川のかとりまかるかなりて見何りて・川こそは嵐山見
わたき毎・戸瀬流の流の公家ハ・人毎人かりれと狂
水のわくよかりておしも赤公し・これもかのこれ何り
さ海・いくいくなく・代々の御幸よ何いかれ毎る所
なれば・かまれ何る詩人哥仙の・言ハ葉の茶みか
此行よりゐる・ひはうまゆゑとゐる岩木の耳よ・は
ゐかれ口すきみハ・おこかまし・きれと・いくておもんん
谷のんとも・えらちの人と・かるうしとは人も有
きんうし・かゐる川作ゐは家居せは・思ふ事何とし
さに我世ハ思かんれとと・とむ人こゝ思まりく公
ゐりて・昔前中書兵兎裘の織作ゐる嵐山織

なりめられしぞれらうまき舟のりてくるしきるに
船霧ゆゑくしこゝとりて・わが友舟もいかやなりやと
わほ浦かゝき浦にたとるみ・うすみのうちらうの
教ゆゑ笑こゝ・かゝ櫓のとゞ志てるもわれらなる・船
人の教ゆゑくしきなりめて・何半と元も史わ・ぬ
うしこゝしい浦く・漕ゑるもめりしるうちに・霧ゆう
しく晴わりて深田れ・くるかゝる沖ようかゝ船
も・かもめ子なるなとの田うみちいきく見てゝ・ゑもめ
計やゆゑいつるさゐこゝ世うし・世の日暮ゆれ・何
る浦ゑ舟とゑ歩て・今夜ハ月の出し来ゑ湊志に
いそしと・艤いしきる祖ゑ・自ハ演ゑ何りて・清さ

儀まに舟ゑ出みけれ・和にちかく海士のいきりする
火見てゐり・ゆゑハ何のあるりや浦人の里かん
と・得浦うきるみ・家もはりくしに柱ハ立て俳に
かゝ櫓うちなれ云ゆとうちわるし・舟ゑ出とへゑ浦ハ
ら成篷と云こうけ・岩のかと成耳ゑ何て・舟成も
其所ゑ住きて世ゆしきる・かれ舟ゑ生れ舟ゑまし
うはいくせん・とのれハ住家と思へもはまてかゝぬ
ゑこ世・山りし月も出みのほりて・渺くゐる真所ゑ
云かりしいぬれ・玉成変をゑん出くゑ見てきゑ何る
人海辺の月といふ中とゑめと云
とく網の加りゑ志付める月を成

とのうとれとや あまれうらん
ぐらみ何まことさいの波まくら揖抜志用れこと後
ゆを用し覚てて何くうれ紛よ。としの関も成ぬ
山のみ船のうち波の上も用へうとくて、何う用う
関よ何うりみなり。何る寺ゆ先帝の御かたち、英
よ一門の公卿殿上人局内侍以下まで、人加なれ
ゆて此何せまのみうつし到ゆり。世間こと永年
とおとへと、其時のこと後うれ志の給いし何うと用
まで。今すくよおといおられて、うれしく覚てられ
不せく神をぬれなる志れ海の
むかしとうきし波のなかうに

それより傍後と弱の足ゆ用せて。以来これなる神ゆ
豊前の国現くのる演よと用り侍しゆ。海らうれ不
かれ此れ用し波風をきましう。今も寸加う折意
畑きれを侍しうは

菱ゆ用ゆ宮古れ侍てハ何て
なみの者れみきくのゆうる用

并れ国筑前ゆこうれの松原史しゆ案見るハ猶
京気こと用り。彼社ハ西れとて海邊ゆ向ゆ勢給ふ。
戒定恵の箱うりまれて。志ましゆ棲んれきん松
神をいかしとと後うゆを侍る。愚詠一首侍を用
ゆしく覚て侍しうを。前の有き用ゆきとられて。用い

又・さる中納言太宰帥隆家・筑紫にくたりける時・
扇あまたせさせ給ふに・筆・枇杷太后宮源しきといふ人の松
らしとゝみしれをかきける・浪こそはよ人は行と
して若木とこそ見し・こゝろかはらす・松原の泉
家海よちかく少し行ありけるに有りし・涼し
かるへき境地なり・玉鳴門松浦門とかは海よ
流れいてゝそは西海・雲浦門は七瀬の淀とぞ
なるよしなるは伊勢大きなる川まて見ゆる・波松
浦にいらせられけるしるしも・若木はかれとも山もとち
かに松の見えては・いとなつかしうおもへる・鏡の神
なれはつるに・都まて松をしたひいとゝおもはるゝかつ見て

松といふ所にこそ宮居をさためて・うつしいはひまつりしも・西
新かたいなる国々の貢にて・いとたふとかりける・香目
若護国にいたりて・草枕むすひけるも・袖に伝ぬ
よ・ほとゝきすを一声とゝのへてきゝけれは
目もならそろ旅中なからまほしき
おし掛るはかり旅をやかれぬ
なかれてゆくさき見もなくしなすありしものへし・掛る雲
のあなちこちをとめてかくかんといはゝしきる

いまはらも あかれまほしき 松と波て 手津の
旅の空 草をとる たとゝもしとゝすれ
旬きけむ かゝ神祀 ねいしまれ 今日見とわて

扶桑拾葉集巻第二十九上終